

どめきいせき 12. 轟遺跡

所在地：吉田郡永平寺町轟

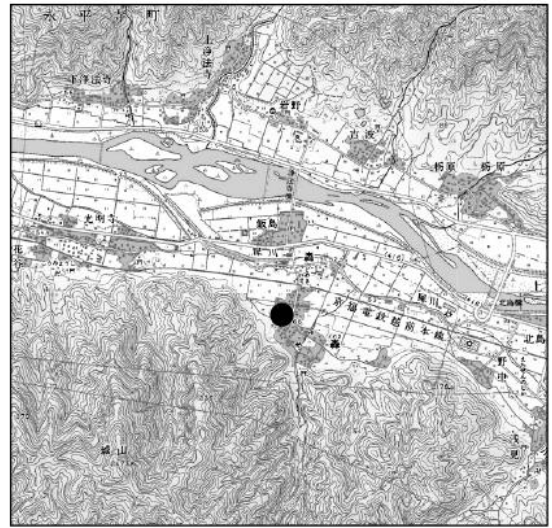
調査原因：一般県道栃神谷鳴鹿森田線道路改良工事

調査期間：平成 22 年 5 月 6 日～6 月 30 日

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：600 m²

時代：縄文・平安・室町・江戸時代



位置図 (S = 1/50,000)

調査の概要 轟遺跡は、九頭竜川南岸の轟集落と重なるように広がっている遺跡です。調査地は集落西側の緩斜面にあたります。

事前の試掘調査で、中世とみられる遺構や縄文時代中期の土器片が出土しました。しかし、縄文土器片は下層の分厚い礫層の上に堆積する土壤中にわずかに含まれていただけで、周辺から流入したものであり遺構に伴うものではないと判断されました。そのため、調査は上層の中世とみられる遺構の検出と下層の縄文土器の回収を基本とし、これにあわせて縄文時代の遺構の存否確認を行い、遺構が確認できれば調査を行うこととされました。

なお、北東には縄文時代晩期の轟呉服遺跡、轟長田遺跡、轟上畑遺跡があり、今回の調査地周辺でも地元の方により多くの土器片や打製石斧などが拾われています。

遺構 今回の調査地は、過去の圃場整備により削平・盛土などの改変を受けていましたが、土坑、井戸、竪穴建物状の遺構、溝などを確認しました。

調査区全体に大小の土坑がありました。多くは径 50cm 未満の小さなものです。その中には土層断面などに木柱痕跡の残る柱穴もあり、直線的に並ぶものも複数ありました。しかし、間隔がやや不揃いで、対の柱穴列が確認されないため、掘立柱建物の可能性は低く、杭列や柵など簡易な区画構造だったことが考えられます。

調査区中央付近に井戸がありました。井戸掘り方は直径 3 m、深さ 2.3m です。もとは石組井戸のようですが、石組は崩れており、元の姿をとどめる部分がありませんでした。

井戸の南西側に竪穴建物状遺構がありました。大きく削られて南東隅だけが残る状態でした。柱穴とみられる土坑はいくつかありますが、確実なものは確認されていません。

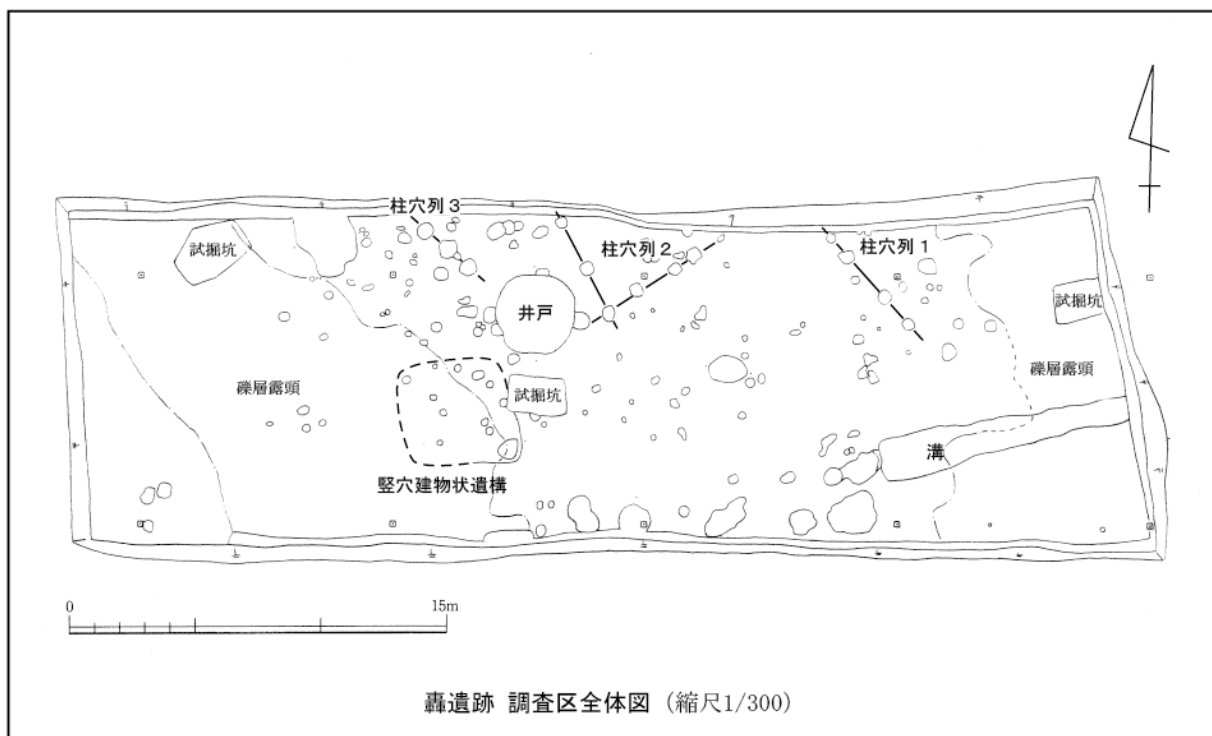
調査区の南東には幅 1.8m、検出長 10m の溝がありました。

遺物 遺構の多くから須恵器・土師器片が出土しました。井戸は越前焼の甕とみられる破片が出土したので、中世以降の所産のようです。竪穴建物状遺構は須恵器・土師器・陶磁器片などが出土しましたが、劣化が激しく、圃場整備の時に移動してきた可能性があるため、時期がはっきりしません。溝からは江戸時代以降とみられる磁器片が出土しました。

まとめ 遺物が少なく、破片ばかりで、遺構の時期をはっきり示すものはないようです。

ほとんどが周辺やすでに削られた部分に広がっていたとみられる遺物包含層から流入したものでしょう。確認した遺構には、調査区南東の溝のように近世以降のものも含まれるようです。出土遺物で最も状態が良いのは土師皿でしたので、おおむね中世以降に営まれた遺跡と捉えられます。

なお、上層の調査終了後、下層の遺物回収および遺構の存否確認のため、礫層露頭部分以外について精査しつつ掘り下げました。しかし、調査区中央付近の縄文土器片を確認した試掘坑の脇で、縄文土器とみられる破片がわずかに出土しただけでした。遺構は確認されず、遺構検出面から0.6m前後掘り下げると礫層に至りました。(御嶽貞義)



井戸 (石組崩落痕跡検出状況 東から)



竪穴建物状遺構 (遺物検出作業 北から)